



第57号

平成29年1月1日(日)

河内長野市教育委員会  
教育長 和田 栄

迎春

## “成長”から“成熟”へ

子どもたちの成長に様々な立場で関わっていただいている皆様方、新年あけましておめでとうございます。

お一人お一人が大きな夢と新たな決意を胸に良き年をお迎えになられたこと、心からお喜び申し上げます。

河内長野の公教育は、その時代、時代に課せられた社会の要請に応え、これまで他に誇る質の高い教育土壌を積み重ねてまいりました。とりわけ、六十数年に及ぶ戦後の教育を根底から再構築した理念を本市教育の根幹に据え、ここ数年実践に移してきた“ふるさとのつながりによる豊かな学び”も、様々な様相に姿を変えながら成果を見せ始めております。

これも、教職員の皆様をはじめ、子どもを取り巻く多くの人達の逞しさに依るものであり、メンバーの一人として心から敬意を申し上げます。

さて、戦後70年を過ぎ、我が国の社会は試行錯誤を繰り返しながら、今、大きな曲がり角を突き進んでおります。その潮流は、まさに“成長の時代”から“成熟の時代”に向けて大きな渦を巻きながら流れていると言えるでしょう。

21世紀に足を踏み入れて以来、平成18年末の『教育基本法』改正を契機にして、“先行き不透明”というキーワードを掲げながら“第3の教育改革(平成の教育改革)”が、今、新たな足跡を残し始めています。

戦後60年に及ぶ“成長の時代”の教育に終止符が打たれ、“成熟の時代”に向けた教育が、教室の中まで流れ込み始めているのです。

“教育は未来への投資”という言葉があります。

いつの時代においても不易な至言ですが、目の前の子ども達が将来足を踏み入れる“未来”は、今以上に価値観が多様化し、グローバル化の進んだ社会と言えます。その社会では、多彩な人々が対等な立場で全員参加している。そして、自己の思いを他者との対話を通して価値観を高めようとする創造的な努力が日々営まれていることでしょう。きっと、生きいきと暮らせる関係性が、今以上に保障されている世界であろうと思います。

今、子どもたちと対峙している私たちの責務は、そうした社会をつくるための資質、そして、その社会において必要とされるスキルを発達段階に応じて子どもたちに授けることと言えます。そのためには今、教育活動の場で特に以下の視点に意識して取組まねばならないと思っています。

- 人工頭脳(AI)の飛躍的な進化と共存できる“人間力”の育成
- 成長の時代を支えた“文化”と、成熟の時代に必要とされる“文明”とのバランス
- 高度な多様性に包まれた社会の中でも埋もれない“個性”の増長

“花は無心にして蝶を招く、蝶は無心にして花を訪ねる！”

“子どもの純真な心こそが誠の仏の心である”とした良寛和尚の遺した言葉です。

地域の未来を担う子どもたちの成長は、その地域に住む人々の希望です。そして、その子ども達すべてが、異なる人格を持って生きているのです。

私たちは、定型社会の価値観によって画一的な育ちを要求するのではなく、一人ひとりの特性、一人ひとりの存在や尊厳を何よりも大切にしなければなりません。そして、一人ひとりが、過去の自分と競いながら今の自分を高めていく創造的な努力を手助けしなければならないのです。

他者との関係性の中で自分を評価し、謙虚で奥ゆかしく自分を押し隠すことに美德をおく我が国の誇れる文化の中で、子どもたちが“自己肯定感”を高めることは容易ではありません。

だからこそ、私たちは、学校だけでなく地域総ぐるみで未来に舞う蝶たちを育てていかなければならないのです。つまり、子ども達が将来、自分の世界に自信を持って生きていくことの出来る“豊かな学び”とは、地域の歴史や文化、精神性、社会構造など、ふるさとの空気を動かすことによって、より確かなものになるからです。

“ふるさとのつながり”によって初めて、乾いた土壤に水が染みわたっていくのです。

丁酉（ひのととり）は、これまで大切に育て伸ばさせてきたものが転機を迎え、万事が強い勢力をもって物事を實らせる年まわりと言われます。

この一年、ランドセルに生活のすべてを詰め込み登校してくる子どもたちの心を癒す優しい花をふるさとの教育関係者の夢によって、学校全体、地域全体に咲き誇らせることを願っています。

